

みんなで高校行こう会～Zっと scrumへ

釧路における生活保護世帯の中学校3年生への学習支援をきっかけとした地域実践

特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロン理事

日置 真世

釧路市は人口約19万弱の北海道東部の中心都市です。基幹産業の衰退が著しいうえ、少子高齢化や過疎化も進み、地方財政も非常に厳しく、多くの地域課題を抱える地方都市の代表的な存在といえます。かねてより生活保護受給率が高い地域でありましたが、ここ数年はますます高くなり、最近、5%を超えました。特に母子世帯の割合は全国の約4倍で、高い離婚率、児童虐待件数、低学歴など子育て環境も厳しいのが実情です。

そんな厳しい地域ですが、一方では行政やNPOがそうした地域課題に向き合って地道で着実な支援実践が展開されています。なかでも生活保護世帯の中学三年生対象に無料の学習支援としてスタートした「みんなで高校行こう会」から発展・展開している中学生や高校生等の居場所事業は地域ぐるみの取組として現在も進化し続けています。

2007年の晩秋、市役所の生活福祉事務所の職員からNPO地域生活支援ネットワークサロンに電話がありました。「生活保護世帯の自立支援プログラムのメニューの一つとして、中学生対象の勉強会をやってくれないだろうか？」という提案でした。釧路市は2005年から受給者の自立を促すための取組である自立支援プログラムに着手し、地域のNPO等の多様な社会資源と連携しながら受給者のボランティア活動などの社会活動支援、就労支援など多様なプログラムを展開してきました。

その取組は地域連携もあって一定程度の効果を発揮し、広がりを見せていましたが、市役所の担当者は受給世帯の「子どもたち」の存在が気になっていました。2005年のモデル事業の際に地元の釧路公立大学と連携して行った保護受給の母子世帯の実態調査では受給世帯の学習機会や子育て・教育環境の厳しさがはっきりと数字で表れていました。塾や習い事に通う子どもは一般世帯に比べて著しく少なく、逆にいじめや不登校者の比率が高いなど厳しさは想像以上であったのです。また、日々のケースワークの中でも受験に失敗する子や進学しても辞めてしまう話なども見聞きしていました。

NPO側も子どもたちの現状は気になっていました。それまでの子育て支援実践現場においても生活課題を複数抱える生活保護世帯の孤立を目の当たりにし、そうした世帯の親子がリスクと隣合わせで生活していることも肌で感じていたのです。また、2006年度にモデル事業で受託した母子世帯への支援事業（料理教室な居場所づくりなど）で関わる親子からも厳しい生活実態を痛感し、支援の必要性を感じていました。

そうした経緯から私たちは市役所からの提案に大賛成しました。ちょうど、「コミュニティハウス冬月荘」をスタートしていたことが実行を後押ししました。「コミュニティハウス」は地域の中

の福祉的な課題をそれぞれの分野でよく知っている人たちに声をかけ、生活福祉事務所を含む市役所関係者も参加して、道庁の地域主権局の企画でプロジェクトとして発案されました。モデル実践として閉鎖されていた企業の社員寮を再活用し「恒常的な場所」と「コーディネーター」を配置して地域の生活課題を解決するための地域拠点としての模索が始まったばかりでした。まさに、「生活保護世帯の中学生への学習支援」という地域課題の解決のために地域ぐるみで支援を実行するためにはぴったりの拠点だったというわけです。

そうして、市役所とNPOの問題意識や実行の共有とそれまでの協働の蓄積をベースに2008年1月から冬休みの9日間の学習支援実施のため準備が始まりましたが、場所とコーディネーターはいても、肝心の学習支援のための専門スタッフはいません。そこで、市役所が中心となって学生や地域の人たちに声をかけました。自立支援プログラムのメニューとして受給者の方にもお手伝いを募りました。そうして、2007年12月26日に事前のボランティアミーティングを経て、1月8日から「みんなで高校行こう会」がスタートしたのです。

事前のミーティングでは初めての取組であることや、受験勉強のお手伝いという役割の重さからか、集まったボランティア一同が不安の表情を浮かべていました。しかし、話し合いの中で「私たちは学習支援のプロではないのだから、子どもたちと一緒に悩み、一緒に考える味方として子どもたちと一緒に学んでいこうではないか」という共通認識を持ったのです。そうして約15名の中学三年生の参加の下で第1期生の取組が始まりました。

当初は生活保護世帯が対象でしたが、もともと対象を限定することに抵抗感があったため、NPOが独自の相談で関わりを持っていた子どもや参加する子どもたちが友達を連れてくるなどロコミで参加する子どもたちはさまざまな背景でした。ただ、生活保護という貧困背景を含め、母子世帯、非行傾向、不登校、低学力などと何らかの生きづらさを抱える子どもたちがほとんどでした。大人も子どもも個性豊かなメンバーが緊張の面持ちで集まり始まった勉強会でしたが、お互いの存在を認め合い、みんなで居心地のよい場として創り上げようとする思いをもとに、試行錯誤しながらもみるみる人との確かなつながりを実感できる場所になっていきました。

市役所からの委託事業としての9日間はあっという間に終了しました。受験まではまだ1ヶ月半ほどの期間があります。手応えと必要性を実感した私たちは事業の継続を計画しました。子どもたちに継続について相談すると全員が声をそろえて「続けたい」と答えました。そこで、NPOの自主事業「Zっとscrum(ずっとすくらむ)」として受験までの毎週土曜日に継続しました。受験発表の後の3月末には打ち上げパーティーを行い、グループによる振り返りでは子どもたちから「ここがあって本当によかった」という嬉しい声がたくさん聞かれました。大好評と十分な手応えを感じたこの事業は以降、2008年度は夏休みからのスタートすることになり、平日の学年を問わない学習の場「ウィークリースクラム」(週2回開催)もスタートしました。2009年度も事業は継続され、これまでで3期生までの92人が巣立って行きました。

年度	実施日数（日）		参加人数（人）		
	委託	自主	子ども（うち生保世帯）	チューター（うち高校生）	のべ参加総数
2007	9	7	19（15）	17	約 350 人
2008	17	17	36（28）	27（10）	約 800 人
2009	18	15	37（23）	44（19）	約 1200 人

3年目を終了して、この勉強会の最大の特徴は、巣立っていった多くの高校生が多様な形で関わり続けていることです。表の通り、年々高校生の人数が増え、支援機能の継続性が見てとれます。しかし、それは支援を受けることの継続ではなく、社会とつながっていることの継続性であることが最大のポイントです。高校生になるとそれまでの勉強を教えてもらう立場からチューターになることができ、毎回のチューター会議に大人と一緒に参加します。そこでは、自分たちの経験に基づいた子供の目線での貴重な意見が出され、大人たちを支えています。また、卒業生が中心となってNPOが実施する活動の企画や運営に携わる機会も増えました。アメリカの高校生のホームステイ受け入れプログラムではウエルカムパーティーの企画実行を行い、縁日やアニメキャラにふんした踊りを披露するなど大活躍しました。また、料理コンテストをきっかけとした二期生は自分たちでオリジナルの杏仁プリンを開発し、NPO主催のイベントで屋台を出し、大好評でした。また、いつも勉強をしないでゲームばかりしてみんなを心配させていた三期生の男子は高校進学後に別人のような表情で現れて、NPOの介護現場で実習をしたいと志願して大人たちを驚かせました。また、子どもたちからの自主事業の企画もあり、卒業生を中心にしたお泊まり会の開催や今年度は冬月荘に下宿している若者も一緒になりキャンプの計画が進んでいます。

「みんなで高校行こう会」はその名の通り受験勉強支援の場です。しかし、それはわかりやすい入口であって、それだけではありません。釧路の不便な交通事情を考慮した送迎、活動時間が10時から3時までということで給食も無料につき、子どもや家庭の生活も蔭ながら支えます。そして、学習以外にも子どもたちの興味関心や企画によって地域の人たちの協力を得ながら、さまざまな課外活動を提供し、社会活動や人との関わりなどの社会性も支えます。地元の塾講師による特別講座、社会教育施設職員による理科の実験授業、新生児を連れてお母さんがやってきて代わる代わる赤ちゃんの抱っこ体験。バーのマスターによるマジックショーや地元アイヌの伝統楽器ムックリの演奏会、焼き肉、料理コンテストや誕生会など、実に様々です。中学生あるいは高校生という多感で成長著しい大事な時期に総合的、継続的な支援をたくさんの人たちのつながりを駆使して行っているのです。



子どもたちからこれまで勉強会についての意見や感想、思いを聞く機会を多く持つてきました。その中から上がってきた子どもたちの声の主な3つを紹介します。

①勉強が分かるようになった 成績が上がった 勉強が楽しい

学習はきっかけであり、教える側にもスキルがないことが分かっていたため、主催する側としてあまり期待をしていませんでした。しかし、意外なことに子どもたちが口々に言うのは学習効果だったのです。チューターが比較的多く、じっくりと丁寧に付き合うことや子どもたちの自発性に基づいたペースなどがそうした実感をもたらしているものを推測しています。

②いろんな個性の人と関わって面白い

大人と関わるのが苦手だった、暗かったという子どもたちが明るく積極的になったと自己評価しています。勉強会の場に多様な個性の子どもたちや大人たちがいるだけでなく、会場のコミュニティハウスには多様な人たちが出入りしていて、直接的な人との関わりだけではなく、たくさんの人の関わりを見ることがもできます。地域社会や生活様式の変化によって、多様な個性とのかかわりが希薄になるなかで、こうした場は貴重なのでしょう。

③「素」になれる ありのままを認めてもらえる 人とのつながりが実感できる

学校や家では役割意識や周囲の期待から身構えて付き合いをコントロールするような緊張状態があるなか、勉強会の場ではそうした緊張抜きで安心してふるまえるのがいいと言います。当初から大人も子どももお互いに「呼ばれたい名前」で呼び合い、固定化した役割を作らず、話し合いを重視し、民主的に場を運営することで対等で自由な空間が保障されていることがこうした安心を生み出していると考えています。

子どもたちの中には高校受験に失敗する子もいますし、中退してしまった子も複数います。しかし、ほとんどの子たちが今も冬月荘につながり続け、後輩の応援だけではなく「お腹すいた～。なんか食べさせて～」と彼氏を連れて来たり、学校の愚痴を言いに来たり、冬月荘に下宿している児童施設を退所した若者たちの下に遊びに来たり、顔を出さなくてもメールアドレスの変更だけは律義に伝えたり、それぞれ多様な形で関わり続け、その中で複数の大人たちが

そうした若者たちの決して平たんではない歩みを温かく見守り、応援を続けています。

「大人も子どももありのまま」「みんなに認められる大事な場」「自分たちで創りあげる」「大事な居場所」などなど、子ども大人もこの勉強会に関わる人たちはさまざまな表現でその重要性和魅力をリアリティたっぷりに語ります。その魅力の謎を解きたくて、何度もみんなと話し合ったり、話を聞いたり、ほかの人たちに見てもらったりしていますが、まだその謎は解けていません。こうした機会の重要性をたくさんの人たちに発信するためにも、みんなと一緒に実践を創造し続け、謎解きを続けたいと思っています。

参考文献

人が育ち合う「場づくり実践」の可能性と必要性—コミュニティハウス冬月荘の学習会の検討—
(北海道大学大学院教育学研究院紀要第 107 号 2009 年 6 月発行)